

海外食料需給レポート

(2020 年 12 月)

令和 2 年 12 月 25 日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2020 年 12 月の主な動き	1
II	2020 年 12 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2020/21 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 米国と南米の輸出競争の行方	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	令和 2 年 6 月以降の食品小売価格の動向	9

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	8
3	コメ	13
II	油糧種子	
	大豆	18

【利用上の注意】

(概要編)

I 2020 年 12 月の主な動き

1 中国の食糧生産見通し

中国国家统计局「全国糧食生産量データ」(2020. 12. 10) によると穀物、豆類、芋類の生産量は 6 億 6,950 万トンで前年度より 560 万トン、0.9%増産となった。

品目別には、コメの生産量は、単収は洪水等の影響で低下も、作付面積は最低価格買上制度などの助成で増加し、対前年度比 1.1%増の 2 億 1,190 万もみトン。小麦の生産量は、作付面積は華北の地下水くみ上げ過多地域での休耕等で減少も、単収が増加したことにより、対前年度比 0.5%増の 1 億 3430 万トン、とうもろこしの生産量は、作付面積、単収とも前年度並みで 2 億 6,070 万トンとなっている。

また、大豆の生産量は、作付面積、単収とも増加し、対前年度比 8.3%増の 1,960 万トンとなり、史上最高が見込まれている。

一方、国内需要では、アフリカ豚熱の影響が落ち着き、豚肉生産が回復に向かっていることにより国内の穀物価格が高騰したことから、政府は備蓄穀物を放出した。「中国政府は、輸入の増加はこれにより減少した穀物備蓄の積増しのためのものと説明している。なお、中国政府では、現在、食糧安全保障に関する一連の立法作業に入っており、その一環として、中央政府・地方政府・企業と団体が協調した備蓄管理体制の強化を図ることとしている。」

2 ロシアの輸出規制

ロシアにおいては、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い経済が停滞する中で、穀物、食用油等の主要な食品の価格高騰が、プーチン大統領自ら政府に迅速な対応を求める国民生活上の重要問題になっている。これら食品の価格高騰の原因としては、ルーブル安や国際価格の上昇に伴う小麦等の穀物輸出の加速、今夏以降の乾燥によるひまわり等の油糧作物の収穫減少や今秋に作付けされた来年産冬小麦等の不作懸念等が指摘されている。

このような情勢から、ロシア政府は、カザフスタン等と構成しているユーラシア経済同盟域外への輸出に関し、12 月 10 日付けで、油糧種子のひまわりと菜種について、2021 年 1 月 9 日～6 月 30 日までの間、輸出税を現行の 6.5% (ただし、ひまわりは最低 9.75 ユーロ/トン、菜種は最低 11.4 ユーロ/トン) から 30% (ただし、いずれも最低 165 ユーロ/トン) へと引き上げることを決定した。さらに、12 月 14 日付けで、小麦、とうもろこし、大麦及びライ麦について、2021 年 2 月 15 日～6 月 30 日までの間、合計で 1,750 万トンの輸出関税枠を設定するとともに、同期間において、小麦については当該枠内の輸出について 25 ユーロ/トンの輸出関税を課すこと (それ以外の 3 種の穀物の枠内輸出は無税)、枠外輸出については 4 種の穀物とも 50% (ただし最低 100 ユーロ/トン) の輸出関税を課すことを決定した。輸出枠 (1,750 万トン) は、2020 年 2 月～6 月の上記 4 穀物の輸出実績 1,440 万トンを上回るが、輸出規制の施行前には駆け込み輸出が増加すると見られている。

なお、大豆についても、2021 年 2 月 1 日～6 月 30 日までの間、30% (最低 165 ユーロ/トン) の輸出関税を導入する動きがあることが報じられている。

3 豪州の干ばつからの穀物生産の回復

豪州の穀物生産は、2018/19 年度から干ばつの影響を 2 年連続で受けたが、2020/21 年度は、小麦をはじめ冬作物は降雨に恵まれて収穫期を迎え、2016/17 年度に次ぐ史上 2 位の豊作が見込まれている。豪州農業資源科学局 (ABARES) が公表した「Australian Crop Report」(2020. 12. 1) によれば、小麦については前年度比 106% 増の史上 2 位となる 3, 120 万トン、大麦も史上 2 位となる 1, 200 万トン、菜種も対前年度比 59% 増の 370 万トンとなる見通し。これに伴い、小麦の輸出量も 2, 050 万トンと 2 倍以上となり、一時ロシアやウクライナの輸出攻勢で失った東南アジアを初めとする輸出市場についてシェアの回復が期待される。

また、作付けが終了した夏作物についても、降雨に恵まれ、灌漑用水の供給可能量が増加すること等から、ソルガムの作付面積は前年度より 4 倍、コメに至っては 13 倍となるなど増産が見込まれている。



写真 ウェスタンオーストラリア州の
小麦の収穫 (12 月 2 日撮影)

Ⅱ 2020 年 12 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、11月末、210ドル/トン前半で推移。12月に入り、豪州やカナダの生産見通しの上方修正から200ドル/トン後半に値を下げたものの、12月中旬以降、アルゼンチンの乾燥懸念やロシアの輸出制限、米国の輸出改善期待等から、12月中旬現在、220ドル/トン半ばで推移。

とうもろこしは、11月末、160ドル/トン半ばで推移。南米の乾燥天候による生育懸念はまとまった降雨により後退した一方、米国のとうもろこしの輸出や輸出成約が順調なペースを維持したこと、価格はほぼ横ばいで推移し、12月中旬現在、170ドル/トン前後で推移。

コメは、11月下旬、520ドル/トンで推移。タイ産新穀の市場への出回りによる国内価格の低下も、バーツ高や、ベトナム産価格の上昇でタイ産への輸出需要が高まったことからタイ産価格が上昇し、12月中旬現在、540ドル/トン前半で推移。

大豆は、11月末、430ドル/トン前後で推移。南米の乾燥天候による生育懸念はまとまった降雨により後退した一方、米国の大豆の中国向け輸出や輸出成約が順調なペースを維持したこと、旺盛な米国内の大豆圧搾需要から価格は上昇し、12月中旬現在、440ドル/トン後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から 150 万トン上方修正され 27.2 億トン。消費量は、前月から 880 万トン上方修正され 27.2 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を上回り 30.0%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月と比較して、とうもろこしで下方修正も、小麦、コメで上方修正されたことから、穀物全体上方修正され 27.2 億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、小麦、とうもろこし、コメで上方修正されたことから、穀物全体で上方修正され 27.2 億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、4.7 億トンの見込み。

期末在庫量は、8.1 億トンと前月より下方修正され、期末在庫率は前年度を下回る。

(注：数値は 12 月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2020/21 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.0 億トン。消費量は前年度を上回り 6.1 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、16.1%となる見込み。

(注：数値は 12 月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国と南米の輸出競争の行方

米国の2020/21年度の穀物の収穫は終了し、小麦の生産量は前年度を下回るも、とうもろこし、大豆は、降雨過多で作付けに支障があった前年度を上回る生産量となった。一方、南米では、9月以降の降雨不足により遅れていたブラジル大豆や夏とうもろこしの作付けもその後の降雨を受け、ほぼ終了し、生育期に入っている。アルゼンチンは平年より遅れていた作付けが最盛期を迎えている。中国の飼料用需要が回復し、輸入需要が増加している中、最近の米国と南米の生産と輸出競争の状況についてまとめた。

1 とうもろこし

(1) 世界の貿易量

2020/21年度の世界の貿易量（輸出量）は、前月より上方修正され、1億8,600万トンと史上最高となると見込まれている。背景として、中国においてアフリカ豚熱の影響により落ち込んでいた飼料用需要の回復により中国内の価格が高騰し、減少した備蓄の積み増し目的も含め、輸入が増加しており、USDAによれば、2020/21年度の輸入量は前月より350万トン上方修正され1,650万トンの見通し。

(2) 米国

2020/21年産のとうもろこしの収穫は終了し、生産量は降雨過多で作付けに影響があった前年度より6.5%増の3億6,850万トンとなる見通し。なお、輸出量については、6,730万トンと史上最高となるとみられ、ここ数年で低下させた輸出シェアも回復するとみられている。輸出増の要因としては、降雨過多の影響を受けた前年度産と比べ容積重が多く、被害粒が少ないなど品質が良好なこと、中国による飼料

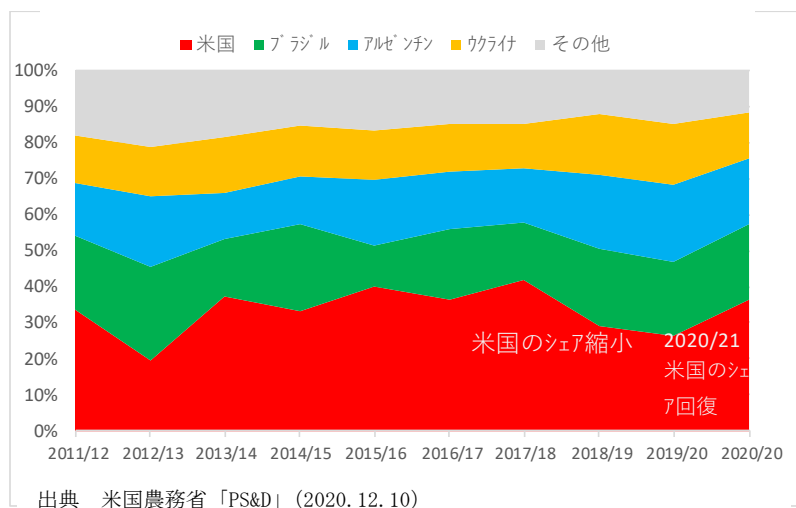
用需要の増加や米中通商協議一次合意の約束達成に向けた米国産の輸入増に加え、従来、中国が輸入していたウクライナ産が干ばつの影響で輸出が減少する見通しであることが背景にあるとみられる。

(3) ブラジル

当初降雨不足で遅れていた2020/21年度の夏とうもろこしの作付けがほぼ終了し、生育期に入っている。夏とうもろこしはブラジルのとうもろこし生産の約1/4を占めているが、国内向けが中心である。大豆収穫後の2021年2月以降に作付けされる冬とうもろこしが主に對外輸出に向けられる。ブラジル食糧供給公社（CONAB）の12月レポートによれば、南部地域の乾燥により夏とうもろこしが影響をうけるとの見通しから、生産量は、前月より下方修正され1億260万トンとなっている。

とうもろこしの輸出は、大豆の輸出が一巡し、冬とうもろこしの収穫終了後の2021年7月以降、活発になるとみられているが、最近、ブラジル産とうもろこしの輸入にかかる植物検疫

図1 過去10年間の世界のとうもろこしの輸出シェアの推移



について中国が合意したとみられ、国家貿易企業の COFCO（糧油集団）がブラジル産とうもろこし 100 万トンの買付を行ったと報道されている。

（4） アルゼンチン

ブラジル同様、降雨不足で作付けが遅れていることに加え、投入コストの少ないソルガムに一部作付けが転換されることから、USDA の 12 月見通しによれば、主に収穫面積の下方修正により生産量は 4,900 万トンへ下方修正された。輸出量は前年度より減少し 3,400 万トンの見通し。

2 大豆

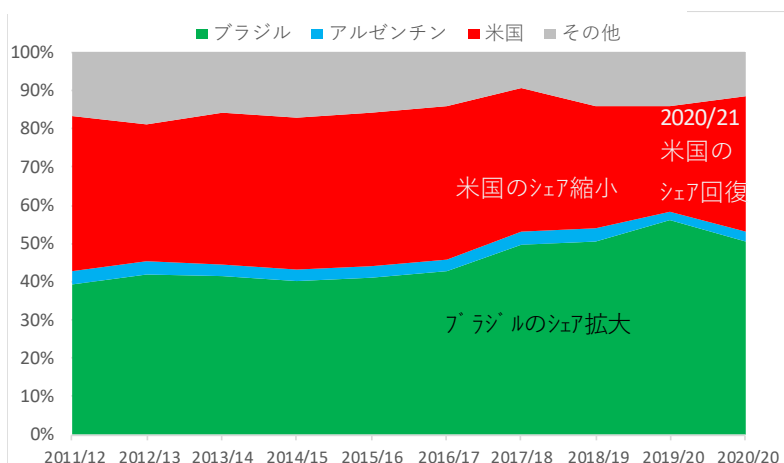
（1） 世界の貿易量

2020/21 年度の世界の需要量（輸出量）については、とうもろこし同様、前月より上方修正され、1 億 6,850 万トンで、前年度より 2.4% 増となっている。とうもろこし同様、中国のアフリカ豚熱の影響により落ち込んでいた飼料用大豆かす向けの需要が回復し、中国の輸入量は 1 億トンに増加する見通し。

図2 過去 10 年間の世界の大豆の輸出シェアの推移

（2） 米国

2020/21 年度の大豆も収穫は終了し、生産量はとうもろこし同様に前年度より 17.4% 増の 1 億 1,350 万トンとなる見通し。なお、輸出量は、とうもろこし同様、史上最高の 5,990 万トンで国内搾油需要も旺盛なことから、期末在庫は大きく減少し、期末在庫率は 3.9% となる見通し。輸出については中国向け輸出が好調



出典 米国農務省「PS&D」(2020. 12. 10)

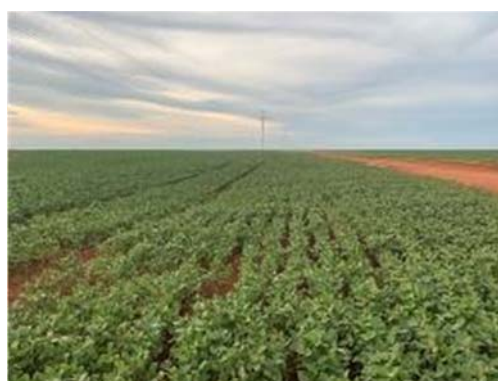
で、ブラジルの新穀の収穫が始まる 2021 年 2 月までは米国産に輸入が集中するとみられている。USDA の「Oil Crops Outlook」(2020. 12. 14) によれば、端境期のブラジルへも輸出したとしている。この結果、ここ数年でブラジルに奪われた世界の貿易シェアの一部を回復するとみられている。

（3） ブラジル

降雨不足で作付けが遅れたが、その後の降雨により作付けが行われ、現在生育期を迎えている。CONAB によれば、南部地域の乾燥により影響をうけるとの 12 月見通しから、生産量は、南部地域の乾燥の影響から前月より下方修正され、1 億 3,450 万トンとなっている。

輸出については、2020 年も中国向け等に順調に輸出を継続しており、前年度よりは減少する

写真 ブラジル マトグロソ州の
生育遅れの大豆 (12 月 6 日撮影)



ものの8,500万トンの輸出が見込まれている。一方、国内在庫が少なくなっていることから、国内需要向けに米国産を輸入した模様である。なお、当初の作付遅れについてはその後の降雨により生育遅れの影響は緩和され、例年どおり2月頃から収穫、輸出が可能となるのではないかとみられている。

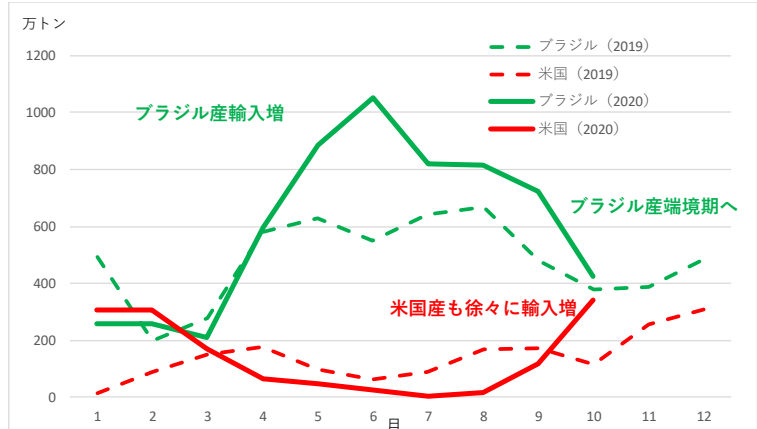
(4) アルゼンチン

とうもろこし同様、降雨不足で作付けが遅れていることから、

USDAの12月見通しによれば、収穫面積が引き下げられ、生産量も5,900万トンへ下方修正された。輸出に関しては、もともとアルゼンチンは大豆粕・油で輸出を行っており、丸大豆の輸出は少ないが、USDAの12月見通しによれば、前年度より減少し、700万トンとなる見通し。

なお、輸出で得た外貨のペソへの短期間での両替措置や、大豆の輸出税の軽減措置が2021年1月には終了すること等、アルゼンチンの農家は政府の政策に対して不信感を持っているとも言われており、農業従事者等のストライキも行われているが、現時点で輸出に大きな支障は出ていないとみられる。

図3 中国の過去2年間のブラジル産、米国産大豆の月別輸入量の推移



出典：中国海関統計

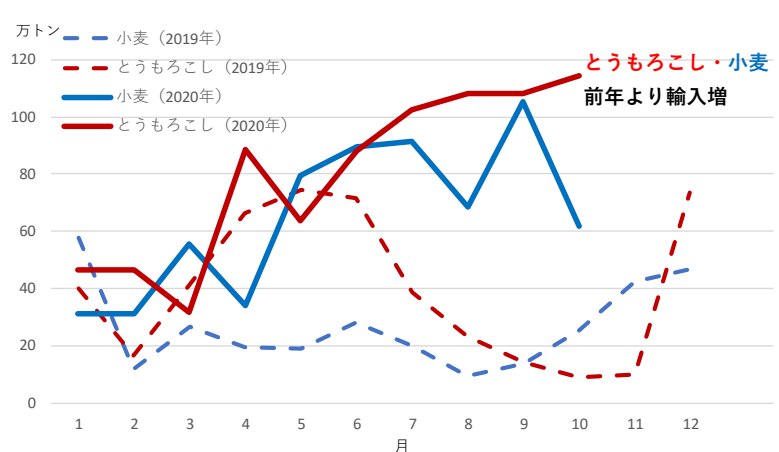
3 今後の世界の貿易動向

中国国家統計局が12月10日に公表した「2020 全国糧食生産量データ」によれば、中国の食糧は6億トンを超え、前年度より増産で、とうもろこしは前年度並み、大豆は史上最高となっている。しかし、旺盛な畜産物需要が回復してきたことから、とうもろこしの生産と需要のギャップは年間2,000万トンを超えるのではとの

見方もある。大豆は1億トンを超える輸入をするとみられている。とうもろこしで不足する分は小麦の輸入でまかなうと見られる。12月に入り、輸入ペースが落ちているとの見方もあるが、前年よりは大幅に増加する見込みである。

今後、2021年2月までは米国に穀物・油糧種子の輸出が集中するとみられるが、それ以降はブラジル産大豆の新穀の輸出が開始されるため、徐々にペースが落ちる可能性もある。一方、ロシア政府が、2021年2月15日から6月末まで小麦、とうもろこし等穀物に輸出枠（1,750万トン）を設定し、さらに小麦にのみ輸出税を賦課（トン当たり25ユーロ）することを決定した。輸出枠の数量は前年同期の実績を300万トン以上上回る数量が設定されているが、小麦については別途輸出税が設定されるため、2021年1月中の駆け込み輸出も想定される。引き続き、世界の穀物・油糧種子の貿易動向に注視していく。

図4 中国の過去2年間の小麦ととうもろこしの月別輸入量の推移



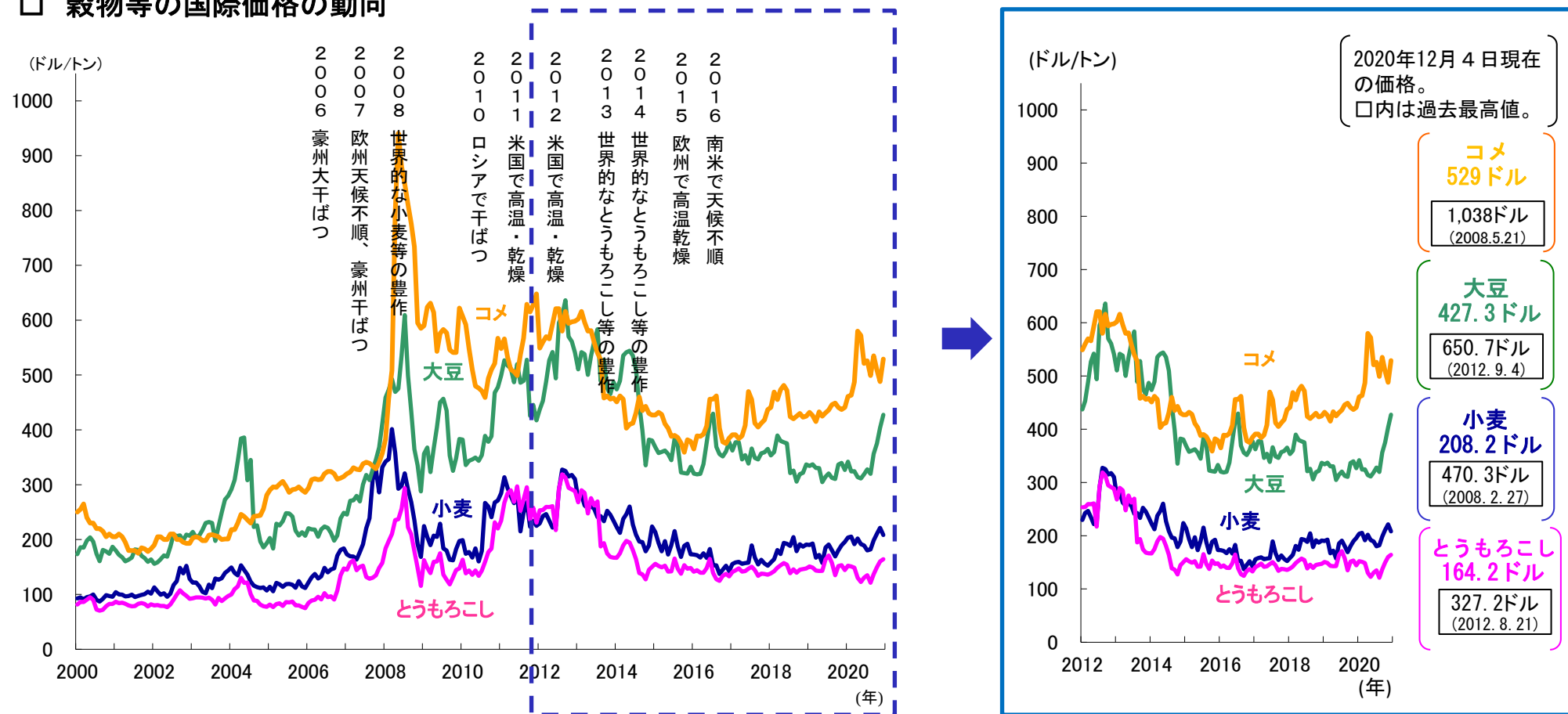
出典：中国海関統計

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。
2017年以降ほぼ横ばいで推移。コメは、2013年以降タイの在庫放出等から低下したが、2020年ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇した。4月末のベトナムの輸出枠の解除等で下落したものの、依然として高止まり。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



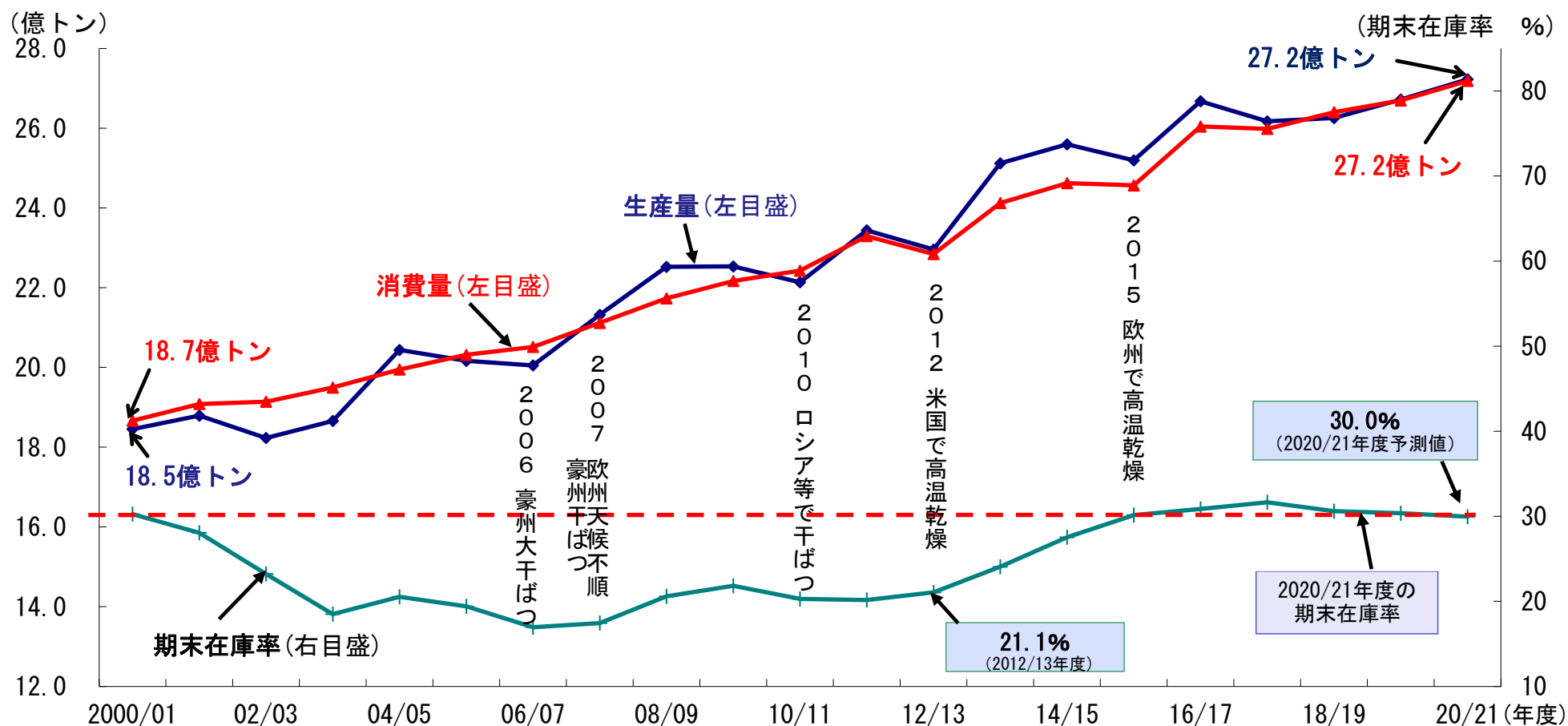
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2020/21年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2020/21年度の期末在庫率は、生産量が消費量をわずかに上回り、30.0%となり、直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 2020)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和2年6月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和2年6月～令和2年11月の 食品小売価格の動向

品目	消費者物価指数(総務省)												
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2						
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前年 同月比)
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.7	101.6	101.6	101.3	101.3	101.3	101.2	-0.9%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.3	101.5	101.2	100.9	100.9	101.0	100.7	-1.3%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	102.4	104.5	104.9	103.3	102.6	103.5	104.1	-1.3%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.0	101.7	101.6	102.0	102.1	102.7	102.9	1.7%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.8	91.8	92.3	91.5	92.2	91.9	91.8	-1.3%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.4	102.7	102.8	102.7	102.6	103.0	102.3	0.5%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	102.9	101.3	101.1	102.4	103.0	102.2	101.9	-2.3%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.1	102.6	102.7	102.4	103.1	102.8	0.6%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.1	94.8	94.1	93.5	94.8	94.4	94.6	1.0%

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和2年7月～令和2年12月の 食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)															
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.2	101.6	101.0	101.6	101.6	101.6	101.4	-0.2%	-1.6%	
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	105.3	107.9	107.2	107.2	106.5	107.2	106.5	-0.6%	-1.8%	
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.7	94.3	94.3	93.9	93.9	93.9	94.3	0.4%	-0.4%	
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	100.1	96.2	97.1	95.9	95.9	96.2	95.3	-1.0%	-3.1%	
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	111.0	110.1	111.0	110.1	109.6	109.9	108.5	-1.3%	-2.3%	
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.7	104.8	104.8	105.8	105.3	105.3	104.8	-0.5%	-1.5%	
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	103.2	103.4	103.4	103.2	103.2	103.2	0.0%	0.2%	
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.4	98.3	99.0	97.6	98.3	98.0	98.0	0.0%	-2.7%	

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4:令和2年4月の調査は、東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県での調査を中止し、5月の調査は東京都、大阪府、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、兵庫県、福岡県での調査を中止し、6月の調査は全国で再開したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。